

＜今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 10 章 14～22 節＞

何が言いたい？ 直前の箇所を読むと、この箇所の内容も見えて来る！

① (直前の 10:1-13) 「偶像礼拝」＝真の神様に信頼し切れない問題。

パウロは今日の直前の箇所、人々が金の子牛の像を造って拝んだ出来事 (出エジプト記 32 章) から、真の神様を信じ切れなくなる人間の不信仰を「偶像礼拝」の問題として取り上げました。そして次の今日の所で、「こういうわけですから」(14) と言って語り始めるのです。

② (14-17) キリストの死による救いに感動した者の共同体が教会！

そこでパウロは、コリントにできたばかりの教会で行われ出した聖餐式 (杯とパン) について急に熱く語ります、「皆は、ご自分の独り子を十字架に架けてまでして救って下さった神様を知り、心打たれ、“この神様をこそ信じて生きよう” と決心し、主の教会を建てるために一つとされた者たちだろう」と。パウロにとっては、キリストの犠牲に心打たれて教会に属した者が、その主に対する不信仰を示すことは考えられないのです。ここにまた「見える教会」に属する意義もあるのです。

③ (18-22) 真の神様からよそ見して心動かされやすい私たち人間。

「悪霊」(20, 21) や「(主の) ねたみ」(22) といった表現に戸惑うかもしれません。しかし、申命記 32 章の「モーセの歌」を読むと分かります (16～21 節に「悪霊」や「ねたみ」)。そこでも、エジプトから助け出して下さった真の神を知っているのに他の神 (存在しない!) に惹かれていく人間を「彼らは神ならぬ悪霊に犠牲を捧げ」(申命記 32:16) と表現しています。それでパウロも、「主の杯と悪霊の杯の両方を飲むことはできないし、主の食卓と悪霊の食卓の両方に着くことはできません」(21)、と語るのです。神様の「ねたみ」とは、そういう姿を取れる人間に対する神様の驚きと憤りを表しているのです (申命記 32:19-21)。

④ 今年も主の教会に連なり、この神様を見つめ信じて生きていこう！

この箇所から教えられることは、今年一年も、何が起こってもきょうきょうせず、主の教会に連なり、ただこの神様を見つめて歩めば心配ないのだということです。「しかし見よ、私こそ、私こそそれ (避け所) である。私のほかに神はない。私は殺し、また生かす。私は傷つけ、ま